

# ふるさとの文学散歩道

種田山頭火 炭太祇 大野林火 鈴木重胤 与謝蕪村  
源頼朝 藤原定家 賀茂真淵 井上通女 清水みのる  
藤原為家 阿佛尼 鱸有飛 夏目甕麿 長坂秋名  
伊藤須賀留 久内和光 東峨 北原白秋 星野立子



## 湖西市教育委員会

### 湖西市教育委員会

〒431-0492 静岡県湖西市吉美 3268  
TEL 053-576-1140

#### 12 鱸有飛 (すずきありとび 1756～1813)

江戸時代後期の国学者・国語学者。新居宿の旅館「尾張屋」に生まれる。和歌・俳諧・狂歌・絵画などのほか、古典・国語研究でも注目すべき業績を残した。この作品は、高師山あたりから、浜名湖の朝のきらめきを詠んでいる。

#### 13 夏目甕麿 (なつめみかまろ 1773～1822)

江戸時代後期の歌人・国学者。白須賀宿の造り酒屋で庄屋の家に生まれる。18歳のとき遠州の国学者内山眞龍に入門したが、師のすすめで翌年本居宣長に入門。家業や自らの研究のかたわら賀茂真淵や宣長関連の著書の出版にも力を尽した。歌人・国学者である加納諸平の父。

#### 14 長坂秋名 (ながさかあきな ?～1861)

江戸時代後期の歌人。長坂家は白須賀の旧家で問屋役(宿役人の最高位)を務めた。

#### 15 伊藤須賀留 (いとうすがる ?～1870)

江戸時代後期の歌人。白須賀宿飛脚問屋「三度屋」の主人。学者としても見識を持ち、白須賀宿内第一級の文人で短歌にも堪能であった。

#### 16 久内和光 (ひさうちかずみつ ?～1894)

蔵法寺住職の16世嘯雲光均和尚であるという。

#### 17 東峨 (とうが ?～1802)

本名を五味六郎左衛門高綱という。今切関所の番頭を務め、新居の人々に俳句や歌の指導を行い文化の向上をはかった。

#### 18 北原白秋 (きたはらはくしゅう 1885～1942)

明治・大正・昭和にわたる詩・短歌・童謡・民謡・小説など幅広く活動。日本文学史上輝かしい業績を残した。昭和7・8年の二度、鷺津を訪れている。この作品は、本興寺日瞻聖人の所望に応じて白秋みずから画帳に書いた歌。



#### 19 星野立子 (ほしのたつこ 1903～1984)

昭和期の俳人。高浜虚子の次女。明るく伸びやかな感性の句風を特色とする。その才と父の指導により才覚を現した。この作品は本興寺花まつりに訪れた際に詠まれた句である。

背景:フォトコンテスト2014 入賞作品

表紙背景:フォトコンテスト2014 入賞作品

背景:フォトコンテスト2014 入賞作品

な感性でとらえている。冷泉家の祖為相の母。この歌は同日記にあり、当時のこの辺りを豊か

#### 阿佛尼 (あぶに ?～1283)

鎌倉時代中期の歌人で定家の次男。承久の乱後、「千首和歌」で認められた。歌風は溫和、平淡。

「新居音頭」や詩集「わが浜名湖」がある。作詞大賞、紫綬褒章等を受ける。主な作品には

#### 11 藤原為家 (ふじわらのためいえ 1198～1275)

「新居音頭」や詩集「わが浜名湖」がある。作詞大賞、紫綬褒章等を受ける。主な作品には

江戸時代中期の歌人。四国の讃岐丸亀に生まれ、幼少から和漢の学を学んだ。若くして江戸の藩邸に侍女として出仕した。この作品は、手形に

#### 9 井上通女 (いのうえつうじよ 1660～1738)

江戸時代中期の歌人。四国の讃岐丸亀に生まれ、幼少から和漢の学を学んだ。若くして江戸の藩邸に侍女として出仕した。この作品は、手形に



(形手女)



#### 8 賀茂真淵 (かもまぎち 1697～1769)

江戸時代中期の国学者、歌人。敷知郡伊場村(現浜松市)に生まれ、江戸に出て字塾を開

鎌倉時代の歌人。父藤原後成のもとに、緻密な歌風で人の心を魅了してきた。この歌の歌枕には浜名の

#### 7 藤原定家 (ふじわらのさだいえ 1162～1241)

建久3年征夷大将軍に任ぜられ鎌倉幕府を開いた。この歌は、初の上洛を終えて鎌倉への帰路、橋本宿

#### 6 源頼朝 (みなもとよりとも 1147～1199)

幼少期から絵画に長じ、文人画で大成するかたわら、早野巴人に俳諧を学び、天明調の巨匠となり松尾芭蕉と並び称される。この句は、関所を開ざつた

江戸時代中期の国学者、歌人。敷知郡伊場村(現浜松市)に生まれ、江戸に出て字塾を開

#### 5 与謝蕪村 (よさざらん 1716～1783)

江戸時代中期の歌人。敷知郡伊場村(現浜松市)に生まれ、江戸に出て字塾を開

鎌倉時代の歌人。父藤原後成のもとに、緻密な歌風で人の心を魅了してきた。この歌の歌枕には浜名の

#### 4 鈴木重胤 (すずきしげたね 1812～1863)

大正・昭和初期の俳人。自由律の独自の句を残した。この作品は、二度目に遠州路を旅した昭和14年4月、新居町駅東の当時の国道西浜名橋付近の風景を



#### 3 大野林火 (おおのりんか 1904～1982)

昭和期の俳人。昭和21年に「浜」を創刊主宰。俳句雑誌の編集長を務め、多くの戦後派俳人を俳壇に送り出した。「友の僧」とは、本果寺第30世住職のこと。

江戸時代中期の俳人。晩年には与謝蕪村と句会をもつなど親交があった。旅好きで当時、旅行家の先駆者であったともいわれている。新居関所も数回通つ

大正・昭和初期の俳人。自由律の独自の句を残した。この作品は、二度目に遠州路を旅した昭和14年4月、新居町駅東の当時の国道西浜名橋付近の風景を

#### 2 炭太祇 (たんたいぎ 1709～1771)

江戸時代中期の俳人。晩年には与謝蕪村と句会をもつなど親交があった。旅好きで当時、旅行家の先駆者であったともいわれている。新居関所も数回通つ

江戸幕末期の国学者。新居宿本陣の当主飯田武兵衛温徳と親交があり、一度ならず訪ね滞在した。この歌は、新居の手筒火花を見て詠

#### 1 種田山頭火 (たねたさんとうか 1882～1940)

大正・昭和初期の俳人。自由律の独自の句を残した。この作品は、二度目に遠州路を旅した昭和14年4月、新居町駅東の当時の国道西浜名橋付近の風景を

江戸時代中期の俳人。晩年には与謝蕪村と句会をもつなど親交があった。旅好きで当時、旅行家の先駆者であったともいわれている。新居関所も数回通つ

大正・昭和初期の俳人。自由律の独自の句を残した。この作品は、二度目に遠州路を旅した昭和14年4月、新居町駅東の当時の国道西浜名橋付近の風景を

#### 1 種田山頭火 (たねたさんとうか 1882～1940)

大正・昭和初期の俳人。自由律の独自の句を残した。この作品は、二度目に遠州路を旅した昭和14年4月、新居町駅東の当時の国道西浜名橋付近の風景を